
《研究ノート》

アブダクションに基づく拡充法
—臨床心理学における質的アプローチのために

葛 西 俊 治

心理面談における聞き取りの特性

逐語録やフィールドノートに基づいて臨床心理学的テーマに迫るとき、グラウンデッド・セオリー(GTA: Grounded Theory Analysis)ないしその修正版、あるいは解釈学的現象学的分析(IPA: Interpretative Phenomenological Analysis)などが用いられてきているが、臨床心理学領域においては、そうした質的分析に先だって具体的な事例報告や事例検討が行われることになる。そこでは、クライアント(来談者)とカウンセラー(面接者)とのやりとりの内容の「要約」が基本的な資料として報告される。来談者とのやりとりの「要約」を作成する手順は特に厳密には定められておらず、事例報告会や事例検討会において臨床心理学の専門家に違和感を与えないような、いわば「素直な要約」として集約されている。本稿では、心理面談の場において用いられるそうした「素直な要約」の作成に関連して「アブダクションに基づく拡充法」を提示する。そして、要約に際して用いられる解釈の構造とその基本的な考え方について検討を加えることを目的とする。

ところで、心理面談における「事例の要約」に先だって、来談者とのやりとりとその「要約」についてはおおむね次のような了解のもとに進められている。

- a) 心理面談の場では、聞き取りを行う面接者の特性(年齢、性別、地域性、その他の社会的状況や身体的要素など)によって聞き取りの内容や方向性が左右されることは好ましいことではないと考えられており、面接者は自身のそうした特徴によって来談者との聞き取りが大きく左右されないような態度を保持することが期待されていること。
- b) 各回の面談内容の中から、来談者の状況を把握し伝えるために重要と思われる内容が、主に面接者の観点に基づいて取り出されて集約されること。
- c) おおむね時系列に沿って各回ごとに集約された内容は「事例についての要約」として、事例検討の場に提示され、心理面談の専門家を中心とした出席者から指摘や意見が出される状況にあること。

来談者の聞き取りは、臨床心理学の専門家集団(実際の集団および理念的な集団)における(a)(b)といった前提の中で行われるとともに、その「要約」は事例検討の場において提示されるという社会的位置づけ(c)の中で行われている。それに対して、一般の質的心理学的研究では、専門家集団に対して聞き取り内容を提示することは、学会発表や

論文などの場を除けば必ずしも制度化されていない。そのため、GTA などでは質的分析に携わる特定の研究者以外の他者による検討や関与を重視し、研究上のバイアスを抑止する第三者的な関わりをトライアングレーション(triangulation 三角測量)と呼び、研究法そのものに組み入れている。

心理面談の場合は聞き取り内容の要約が専門家集団(disciplinary matrix)へと提示されるが、すでに述べたように、聞き取り内容を集約する作業そのものは「研究」ではなく「要約」であり、検討のために提供される「資料」として位置づけられる点が大きな相違点である。なお、ここで用いている「専門家集団」という表現は、科学史上における天動説から地動説への大規模な移行をパラダイム・シフト(paradigm shift)として捉えたT.クーン(Thomas Kuhn, 1922 - 1996)¹⁾の観点に基づいている。そうしたコペルニクスの転回について、クーンは科学者という専門家集団(disciplinary matrix:マトリックスは母体、基盤の意味)が天文学の時代的な切り替えを担っていたことを明らかにしている。それと同様に、臨床心理学の専門家集団は、その専門領域(discipline)において基本的とされる認識と実践の枠組みを提供する母体であり、それは実際の集団のみならず専門領域に関わる理念的な集団としての側面を併せ持つ。

面談における聞き取りは心理面談に携わる専門家集団がおおむね共有する枠組みに沿って行われるが、ここではC.ロジャーズが示した三条件を取り上げて整理しておく。心理面談についてC.ロジャーズが示した三つの条件とは、1)無条件の肯定的関心(unconditional positive regards)、2)共感的理解(empathic understanding)、3)面接者の自己一致(self-congruence)、であり、そうした条件が整うときには来談者側に心理療法的な意味での統合や心理的成長が期待できるとされる。そこでは、1)無条件の肯定的関心と、2)共感的理解という姿勢によって、来談者の世界を来談者側の観点から理解することが求められる。もちろん、そうした立場は原理的には不可能と考えるべきほどに困難な要請であるが、文化人類学的探求と同様に心理面談の専門家はこの(1)(2)によって実際的な対処を試みているといえる。さらに3)の姿勢によって、心理面談の専門家としての知識・経験に基づいて、聞き取りの内容や来談者のあり方に疑問や特異な関心が生じた場合は、来談者に対する問いかけへの動機が自然に高まることになる。例えば、「戸締まりの確認に時間がかかりすぎて…」とか「自分のことが他人に筒抜けになっ…」などの語りから、前者は神経症圏の問題が想定され後者には統合失調症圏の可能性が感じられるなどといった理解は全く一般的な理解ではなく、あくまでも心理面談の専門家としての経験や訓練に基づく限りにおいて「自然」な展開となる。さらに、専門的な知識や体験をもちながらも一個人としての「自己一致」、すなわち、人生経験を含めた自らの認知的整合性を維持するという内的衝動にしたがって、来談者の語りに対する疑問や懸念に基づいて質問や確認が行われていく。そうした実際の行為そのものがさらに面接者の「自己一致」を高めるものとなるが、そうした「自己一致」とは専門領域における経験と訓練を前提とした専門家という、実際のあるいは理念的な社会的アイデンティティをその基礎においていることは言うまでもない。

社会的現実の多様性と個別性

昨今、社会構築主義の影響がナラティブ・アプローチなどの発展に見られるが、そこではしばしば専門家としての権威性を問題視して排除する動きが認められる。しかし、心理面談の場において排除すべきなのは専門性を優先させた権威性であり来談者に対する権威的関係であって、専門的な経験と訓練によって培われた面接者の社会的立場や知識や能力が、「権威性」の名の下に排除されたり無化されたりしてはならない。なお、社会構築主義の影響については、たとえばソーシャルワークなどの他領域においても、その領域の専門性・特殊性に基づいて批判的に検討しているものがある(秋山、2004)²⁾。

ところで、社会構築主義に基づくとされる臨床心理学のアプローチの中には、奇妙なことに自らの専門性を来談者の支持によって社会的に確証させようという動きがある。来談者との語りの内容(録音器による逐語録ではなく、やりとりを要約したもの)を来談者に確認してもらい、その一致を重視したりそうした内容を学会などで発表するという展開は、権威性の排除ではなく心理面談に関わる専門性の放棄と言わざるを得ないほどの問題性をはらんでいる。録音器による逐語録作成が不可能だったりばばかれる状況では語りの内容を物理的に残せないため、面接者が自らの記憶に基づいて「ノート」を作成するほかない。そうしたノートには記憶違いや誤解の余地があることは分かる。事実関係についての確認程度であればそうした確認が必要な場合も考えられる。しかし、本稿の「アブダクションに基づく拡充法」において以下に示していくように、面接者が作成したノートは記憶違いや誤解の可能性を含みながらも、面接者が経験した個別的現実の一端という意味で、面接者にとってはあくまでも「一次資料」であるという立場を主張する。面接者が記憶に基づいて構成したノートは、来談者の語りそのものではないという点で二次的な資料とされるべきかもしれないが、本稿ではそうしたアプローチはとらない。すなわち、社会的現実が人と人との関係の中から生み出されるという社会構築主義の立場とともに、そうした社会的現実はしかし個人毎それぞれに別個に構成され維持されるということ、すなわち、社会的現実は常に共有されているのではなく個人毎に異なる内容をもつ個別の現実としてあり、人はそれぞれに、また専門家は専門家としての「自らにとっての社会的現実」の中に生きていと捉えるからである。つまり、記憶に基づいて面接者が作成したノートは面接者が体験してきた現実であり、その中には専門家としての訓練や知識に基づく理解や問いかけが含まれている。そうした専門家としての「面接者側の現実」は来談者を理解しようとする専門的態度から作り上げられているため、心理的問題や困難さのために訪れた来談者側の観点とは明らかに異なる。言い換えるならば、心理カウンセリングの場とは、「来談者側の現実」を「面接者側の現実」と対比し、面接者はそのズレに基づいて、「来談者側の現実」を構成してきている様々な要因・要素を見抜いていくための場として位置づけられる。つまり、両者の「現実」の突き合わせとは、単なる聞き取りの誤りや聞き違いの確認のために行われるので

はなく、面談の目的である心理療法の実践の場そのものとして捉えるべきといえる。

なお、社会的現実が個人毎に異なるという事態は、たとえば海外では「羅生門問題 Rashomon problem」あるいは「羅生門事態」と呼ばれることがある。黒澤明監督による映画「羅生門」では殺人がそこに関係する者たちの間で全く異なる顛末として認識され語られたという衝撃から、羅生門事態とは体験の個別性と真実の不在を語る際のキーワードとして知られている。ところで、精神科領域において統合失調症圏の者が来談者だった場合、しばしば「幻聴」と呼ばれる体験を報告することがある。本人のみにしか聞こえないという点で「まぼろし」という言葉を付されて「幻聴」とされるのだが、しかしそれは専門家側からの一方的な見方に過ぎない。なぜならば、本人は「聞こえてくる」というリアルな現実の中に生きており、本人にとっては「まぼろし」などではない。専門家を含む多くの他者にはそうした「声」が「聞こえていない」という事実に基づいて、「聞こえる」と言う来談者の言葉を否認するのは、単に多数派による社会的圧力と言わざるを得ない。そこには、互いに相容れない異なる二つの「現実」がそれぞれの者にとって存在していると、二つの「現実」を分離して捉える必要がある。なお、統合失調症者の「幻聴」についてはそうした「声」によって本人が支えられている場合があることが指摘されている(松田, 2006)³⁾。したがって、「幻聴」と名付けることによって本人にとっての現実を否認するのならば、ロジャーズが説いた「無条件の肯定的関心」「共感的理解」という臨床心理学の基本からも逸脱することになる。このように、事態はまさに「羅生門事態」であり、二つの異なる現実の中でどのように相手にアプローチしていくのが、そのズレをどのように扱っていくのが心理面談の過程を作り出していくと捉えなければならないだろう。

生きている現実が個々人の間で異なるという立場は、たとえば、パーソナル・コンストラクト理論(personal construct theory)を唱えた臨床心理学者 G.ケリー(George A. Kelly, 1905-1966)^{4) 5)}によっても示されている。ケリーによれば、人は「科学者としての人間 man the scientist」として世界や物事の「予測と制御」を行い、そのための理解と反応の図式とでもいえる「パーソナル(個人的)なコンストラクト(構成)」をそれぞれに発展・展開させているという。ケリーの構成主義的代替主義(constructive alternativism)とは、「世界についての我々の全ての現行の解釈は、改訂され置き換えられることになる」(Kelly,p.11 前出)という考え方であり、そのようにして個々人は自らの「パーソナル・コンストラクト」を構成する。そのため、結果的に個々人が生きている現実とパーソナル・コンストラクトは互いに異なるものとなる。ケリーによれば、心理的な問題とは本人にとっての現実を作り出す働きをしている「パーソナル・コンストラクト」が現実とそぐわなかったり不適切なものになっているため、本人が生きている「現実」を相対化することによって心理療法が進められるべきとされる。ケリーは「役割固定療法 fixed role therapy」と呼ぶアプローチを開発して、心理的問題を抱える者が自分とは異なるパーソナリティ(パーソナル・コンストラクト)を担い、異なる生き方と異なる現実を体験する方法を実践した。そのようにして、本人のパーソナル・コンストラクトへの影響を介し

て、本人にとっての「現実」に介入することが心理療法として大きな効果を挙げることをケリーは明らかにしている。

アブダクションの個別性と状況限定性

アブダクション(abduction)とは、帰納的推論(induction)と演繹的推論(deduction)の間にあるべき第三の推論形式としてC.パース(Charles Sanders Peirce, 1839-1914)⁶⁾によって提唱された。その内容はたとえば次のように解説されている(葛西、2005)⁷⁾一。

まずアブダクションとは、「驚くべき事実Aがある」「しかるにBであるならば、Aであることは理解できる」「ならばBである」という推論を行うものである。たとえば、「驚くべきことに魚の化石が出てきた」のならば、「かつて、そこが海だったならば、魚の化石が出てくることは理解できる」、したがって「かつてそこは海だった」と推論するものである。こうした推論内容はそうした可能性の一端を提起するだけであって、「かつて確かにそこが海だった」ことを論理的に真とするものではない。その意味で「後件肯定の誤り fallacy of affirming the consequent」とみなされる推論ではある。しかし、アブダクションという「仮説発想」によって、事柄相互の結びつきが明確となり構造化が進むという働きがある。また、パースが述べているアブダクションの他の例では、「ナポレオンという名前に結びついた文書や遺跡が多数見つかっている」のならば、「ナポレオン・ボナパルトは実在の人物だったと考えるならば、その事実は理解できる」。それならば、誰一人見たことも会ったこともないにも関わらず「ナポレオンは実在した」と措定する、というものである。このように、一度も行ったことのない国や土地、一度も会ったこともない人々や体験したことのない出来事について人々が類推して判断する際、あるいは語り手が語る未知の世界を類推して判断する際にも、パースが示したアブダクションという推論形式がとられているのである。(p.14)

この例から明らかのように、アブダクションは「真実」を扱っているのではなく、ある事柄から物事が類推される際の「推論の構造」を指し示している。また、「驚くべき事実Aがある」「しかるにBならばAであることは理解できる」「ならばBである」という推論が可能となるためには、事実Aに関する知識Bや経験Bがなければならない。すると、その知識や経験はどのようにして得られていたのか、また、そうした知識の一般性や普遍性はどうなっているのか、という大きな問題が立ち現れてくる。

ケリーが示しているように、世界についての理解図式ないし心理的反応システムの全体と目されるパーソナル・コンストラクトは個人毎に異なるものである。つまり、個々の知識や経験も個人毎にそれぞれに異なるから、たとえば化石がどのように形成されるかを知らなければ、「魚の化石が出てきたから、そこはかつて川や海の底だった」という仮説そのものが出てこないし共有もされない。つまり、後件肯定の誤りとみなされ

る推論形式であるアブダクションは、そうした推論に関わる知識や経験がない者から賛同を得ることが原理的に不可能であって、そうした推論の可能性について何らかの知識や体験がある者の間でのみ成立することになる。臨床心理学に限らず実際のまた理念上の専門家集団とは、アブダクションで示された推論にそれなりの可能性があることを共有する母体であり、そうした共有の前提となる知識や経験をそれなりに備えた人々であり、そうした限定的な社会領域においてアブダクションの妥当性が了解されることになる。

たとえば、ガリレオ・ガリレイ(1564 - 1642)による地動説の主張は、アブダクションという推論が社会的にどのような困難をもたらすかを反面教師として示している。中世ヨーロッパにおいて異端審問所の宗教裁判において弾劾されたガリレオは「それでも地球は回っている…」と自らの理念を貫いた。幽閉されて両眼を失明するも自説の著作に没頭し、その死後には葬儀も墓標も許可されなかったという。宇宙空間に飛び出して天動説の間違いを自ら確認したわけではないガリレオが行った「科学的」な思考とは、実は惑星の観測データに基づいた類推であって、それはまさにアブダクションの推論形式そのものだった。すなわち「太陽の周りを地球や他の惑星が回っているというように考えると、天文観測のデータは非常に簡潔に理解することができる。したがって、地球が止まっていて天球が動いているのではなく、地球が太陽の周りを回っているのである」と。そうしたガリレオの主張に反して、「地球が動いている」ことを体感することがない地上の宗教者達家は自らの体験的確信と宗教的確信を貫いたのに過ぎなかった。つまりガリレオの地動説とは、彼らにとっては後件肯定の誤りを含んだ危うい仮説に過ぎず、それを観測データに基づいて主張し続けるガリレオが単なる異端者とされるのは極めて自然な成り行きだった。そうしてみると、推論形式としてのアブダクションそのものの問題点よりも、そのアブダクションによって示される事柄の判定に関わる社会的基盤の存在がアブダクションの成否に大きく影響してくることが見えてくる。

「現実」を構築する「専門家集団」

先に面接者の「ノート」を一次資料として扱うべきことを述べた。それは、来談者との語り合いの中で面接者が捉えた限りにおいて記述された資料であるという意味で、ノートは「面接者によって構成されたところの来談者の世界」の記述ということである。もちろん、来談者の語りや語られた通りに文字で綴られている逐語録的な記述は一見「客観的」な記述に見えるので、「面接者によって構成された」ものには感じられないことが多い。しかし、次に述べるように、そこには面接者による「選択と構成」という操作ないし心的働きが関与していることを見逃してはいけない。

たとえば、新聞記事やメディアによる報道が一見「事実」「真実」を報道しているかのように見えることから「客観的」とされることに異を唱えた新聞記者・本多勝一⁸⁾ ⁹⁾の観点がここでは参考となる。ベトナム戦争における「殺される側の論理」を明らかにし、

また例えば北海道における「観光に来られる側の論理」といった視点への切り替えは、「現実」というものが「される側」の立場ではその姿を大きく変えることを指摘している。それとともに、もう一つ重要な指摘が、暗黙の「選択」による「現実の構成」の問題である。

すなわち、どのような記述も映像も「対象のある一部に注意を向けている」という意味で常に意識的無意識的な「選択」によって切り出されているのが実態である。例えば、カメラによって映像を物理的に残す際にも、なぜその時にその場所で被写体のその部分を選び、それをなぜ拡大あるいは広角で捉えたのかなど、撮影という作業は常に選択という操作を免れることができない。「写真」でさえも意識的無意識的な選択によって「構成された現実」であるし、文章による記述もまたそうした選択によって「構成された現実」である。それらはいずれも「客観的」と呼ぶべきではなく、様々な選択によって構成されて記録された資料として常に限定的に扱うべきものとなる。

したがって、一見来談者について書かれている「面談の要約」であったとしても、実はそれは面接者が見て感じて思ったものであって、厳密に言えば、あくまでも「面接者によって推測され構成されたところの来談者の世界」として位置づけられるべきである。しかし、実際に面談内容の「要約」に基づいて討論が進められる事例検討の場においては、こうした原理的な問題点が大きく取り上げられることは稀である。なぜならば、事例検討の場は心理的な問題を抱えて尋ねてきた来談者の理解と支援を検討するための場として位置づけられていて、そうした実務的な場には哲学的めいた議論は馴染まない。もちろん、聞き取りに際して面接者側の特性や性癖がむき出しになり来談者側の事情を的確に聞き出せていない場合などに限って、その面接者の問題点として批判されることはあるだろう。しかし、事例検討においてはおおむね、専門家集団において暗黙裏に想定されている「(専門家としての)面接者像」の枠組みの中で「専門領域の訓練を受けた面接者によって行われた、相談者についての妥当な聞き取り」として扱われていく。そのため、面接者自身の特性や性向による偏りの存在は認識されながらもとりあえず棚上げされ、検討の場ではあくまでも「来談者の語りのついでに要約」を扱い、その内容に基づいて「来談者の理解」へと進むことになる。

ここまでの記述によって筆者が意図していることは、主観的・客観的という抽象的で定義の困難な言葉を用いることなく、心理面談において面接者が示した「見方」や「要約」などが、臨床心理学に関わる専門家集団による了解可能性に基づいて、専門家集団内という条件下での「一般性」を得ていることを示すことである。それと同時に、「見方」や「要約」は個々人のパーソナル・コンストラクトの相違に基づく必然的な相違を含むため、そのことをどのように明示し、専門家集団内での実際的な検討へと結びつけるかという点である。本稿では、以下の述べる「アブダクションに基づく拡充法」によって面接者本人の観点を明示し、それによって個々の面接者の個別性を俎上に上げ、そのことを通じて結果的に来談者の問題をよりの確に把握することを目指している。

語りに基づく類推と拡充について

比較的少数の対象者からの聞き取りでは、問題やテーマの詳細について必ずしも十分に聞き取りできないことが多い。特に、様々な職種や領域、立場や見方、あるいは本人の性向など、多くの要因が関わる状況では、それらを十分にカバーして適切に集約を進められるほどの人数を得るのは容易ではない。そうした場合、事例の内容をそのまま羅列して記述するような報告に留まり、テーマについての理解と研究が十分に深まったと感じられないことも起きる。こうした研究状況においては、従来の GTA や修正版 GTA などでは必ずしも対応できないことも多い。臨床心理学の修論指導などにおいて筆者は、研究対象となる者が極めて限定的で人数も限られ 10 人にも満たないような場合でもそれなりに理解が深まるようなアプローチを模索してきた。そうしたアプローチの一つである関連性評定質的分析(略称 KH 法)¹⁰⁾は、KJ 法的な集約化に基づいて林の数量化理論Ⅲ類を用いて分析し、カテゴリーの中に何らかの軸構造を見いだすものである。

しかし、そこまでの抽象化には至らずにテーマの詳細を把握したい場合には、そうした方法は必ずしも利用できない。そうした状況の中で、比較的少数の対象者からの聞き取りを集約する際に、「分析」ではなく「聞き取りの内容を拡充する」ことによって、テーマに関する細かな状況や細かなカテゴリーなどを得る方法を試してきた。ここで「拡充 amplification」とは、語りの内容から自然に類推される事柄を語りに付加することによって語りの意味内容を広げることを意味する。筆者の体験では、対象者のある一人の語りと同じような語りが他の対象者から得られなかったとしても、それぞれの語りを「拡充」していくと、結果的に意味内容が近いものになることが多々あったことがヒントになっている。例えば「何々がつらい」という語りがあったとして、別の対象者が「何々にならないように避けている」と言ったとしよう。カテゴリー化を進める中で、この二つの語りは「何々への否定的態度」などのようにやや抽象度の高いラベルによって集約されるかもしれない。また、KJ 法によれば、この両者はたとえば「何々がつらく避けたい」といったラベルが事後に付加されるようなまとまりに集まってくる可能性もある。前者のカテゴリー化では、「何々」・「否定的」という要素がラベルに含まれており、後者の KJ 法的集約では「カードの土の香を残す」「情念によって集まる」という川喜多二郎の指針によって、二つの語りのカードがたまたま一個所に集まり、二つの語りの内容の合体・合算・融合として「何々がつらく避けたい」とラベル付けされたとしよう。いずれの場合においても、表現が異なる語りであっても何らかの観点における「共通」が類推されることによって同じ枠組にまとまっているといえる。それではその「共通性」とは一体何かが問題となるが、「アブダクションに基づく拡充法」とはその「共通性」を、以下の手順によって明示することを基本とする方法である。具体的には、「何々がつらい」といった語りから自然に類推してたとえば「それがつらいので避けたい」「避けたことがある」「避けられたらなあ」「そういう場面に遭遇しないようにしている」「(そうした状態に至らないように)工夫している関わっている」などなど、表現そのものは

異なるが、「つらい」ということに関わる様々な状況や語りが想像されてくる。そうしたの連想的な「拡充」とともに、それらが元の語りからどの程度自然に得られるかを面接者自身が数値的に評価(「妥当性評価」)することによって、来談者の心理的世界についての暫定的な仮説(theory)を提起するとともに、そうした仮説の妥当性の判断の根拠を専門家集団に対して明示するものである。

ちなみに、来談者の「語り」についての理解とは、ここでは、語りから自然に得られる推論・類推(アブダクション)に基づいて、そうした語りの内容や因果関係や、物事との関連性などを含めた理解図式(schema)を作りあげることである。そうしたアブダクション的な推論は、語りを理解するために必要な事柄を必然的に追加し、語りの内容を自然に拡充していることになる。その際、「アブダクションに基づく拡充法」には様々な技法が想定されるといえるが、本稿ではとりあえずそうした技法の一つを示すことにする。

アブダクションに基づく拡充法

「アブダクションに基づく拡充法」とは、聞き取りの内容から自然に想定されるような前提(アブダクション)を言語化して書き足すことによって、面接者・研究者の思考プロセスを明示しつつ進める、要約の方法である。ここでは以下のようにA、B二つの操作を行う。続いて、「妥当性の段階」を参考にしつつ語りの意味内容を拡充して、その内容を集約して一つの理解図式ないし来談者の内的世界についての仮説として取り扱うものである。

A.主に、聞き取りの内容から推測される「通常の記述」、聞き取りの内容を否定した形での「否定的な記述」、聞き取りの内容を願望や仮定法の形で示す「仮定法的な記述」によって拡充を試みる。

B.聞き取りの内容がそのように語られるための前提を見いだすために、アブダクション的発想によって得られる前提に次のような「妥当性の段階」を添える。

- (1)そうした語りが可能となる前提として一般に自然に想定されるもの。
- (2)そうした語りが可能となる前提としてかなりの結びつきが想定されるが蓋然性がやや低いと思われるもの。
- (3)そうした語りが可能となる前提としてそれなりの結びつきが想定されが蓋然性はそれほど高くはない。しかし、他の語りなどとの関係であえて記しておくべき事柄。

この方法を援用して「業務として葬儀に関わる人の聞き取り」を集約した研究としては足立(修士論文、2013)があり、そこでは次のように解説を加えている一。

アブダクションに基づいた拡充法においては、語られた内容から、自然に想定されるような前提(動機)を言語化し、書き足すことにより、「動機の把握」に関わる

筆者の思考プロセスを「聞き取りの内容から推測される通常の記述」、「聞き取りの内容を否定した形での否定的な記述」、「聞き取りの内容を願望や仮定法の形で示す仮定法的な記述」によって明示した。さらに、聞き取り内容が前述したような記述で語られるための前提を見出すために、アブダクション的発想によって得られる動機に (1)、(2)、(3) で「妥当性の段階」を表した。(1)一般的に自然に想定される事柄として得られるものを(1)、かなりの結びつきが想定されるが蓋然性がやや低いと思われる事柄を(2)、それなりに結びつきが想定されるが、蓋然性はそれほど高くないもの、しかし、他の語りなどとの関係であえて記しておくべき事柄を(3)とした。

以上の事から、語られた内容より、筆者がどのように語りを受け取り、整理を行ったかを明示し、肯定ないし否決の検証可能性を残すものとする。

例えば、「相手のために何かしてあげたくても、他の業務もあるため、相手の方に尽くすことができない」という語りがあったとする。この語りに基づいて、A、Bの方針にしたがって以下の様に語りを拡充する。括弧内の数値は拡充された内容についてそれが自然な拡充かどうかの度合いを示す「妥当性」の数値である。

— 語りの内容から自然に推測される事柄をそこに併記する。

「何かしてあげることが大事、良い事、すべきこと(1)」「自分はそういう相手を大事にしたいという気持ちがある(1)」「相手もしてもらいたいと思っているだと思(2)」など。

— 語りの内容を否定した形に書き換えをする。

「他の業務がなければもっと尽くすことができる(1)」「何にもしてあげられないのはつらい、そういう状態はいやだ、自分に立つ瀬がない(2)」など。

— 語りの内容を願望の形あるいは命令的や懇願の形に書き換える。

「相手のために何かしてあげられればなあ(1)」「相手のために何かしてあげられように状況を改善してください(2)」「業務の見直しがあればなあ(3)」など。

こうした拡充によって、「相手にしてあげること」「相手に尽くしたいと思っていること」「それなのに尽くすことができない事情があること(他の業務など)」という理解が得られるとともに、たとえば「利他的行為という方向性と思い」「そうした思いと衝突する業務の実情」といったように、抽象度を一段上げた理解と表現も自然に可能となってくる。さらに聞き取りを進められたならば、例えば、「業務改善が難しい事情があり、現場で手を尽くそうとする思いが途絶し、やるせない気持ちになる」などの語りも得られそうであり、そうした語りを導きうる質問も考えられてくる。こうした展開についてはこれからの実践的アプローチによって確認すべき点はいくつかあるが、アブダクションに基づいて問題やテーマについて事前に周到に準備するならば、少人数からの極めて短い語りからでもテーマや問題についての全体的な理解を得ることが期待できるといえ

る。

このように「アブダクションに基づく拡充法」には次のような特徴がある。1) 語りの内容を全体として理解するために必要な補足(拡充)を行うことにより、少人数の語りからでもテーマや問題についての全体構造の理解図式を得ることができること、2) 面接者・研究者の観点を明示しているため、事後にその妥当性をさらに検討することで理解図式の妥当性を高められること、3) 引き続き面談や研究では拡充法によって拡充した部分に焦点を当て、語りとして得られていない部分をあらためて確認することによって拡充部分の妥当性を確認できること、などである。

なお、「語り」はしばしば、個別の語りがそのまま一般的な意味を語っていると了解すべき事態となっている場合がある。たとえば、事例検討会などにおいては、来談者との面談場に立ち会った面接者(およびスーパーバイザーや陪席者)を除いて、「Aさん」という名称で呼ばれる人が実際にどういう容姿でどういう人柄なのかは誰も知らない。つまり、本人に直接に会ったことのない検討会の出席者にとっては、「Aさん」についての「面談の要約」とそれについての説明のみが唯一の情報となる。したがって、事例検討の場では、大きく分けると二つの異なる「Aさん」が混入することになる。本人と直接面談をした面接者などにとっては、そのときの記憶と照合しつつ語られる「Aさん」と、説明として与えられた言語的な情報のみに基づいて構成された、検討の場の出席者にとっての「Aさん」(以下「A x さん」と表記)、である。「Aさん」という言葉が指し示す内容はこのように異なるにも関わらず、両者の区別はないままに説明と議論が進められていくのだが、そうしたことが可能となっているのは、人がもっている比喩的理解、そのうち「個と類」に関する比喩的理解である「提喩的(synecdoche)な理解」という理解方法(葛西、2005)であることをあらためて指摘しておく。出席者が個々に推測して構成された「A x さん」というのは、実は「Aさんのような(特徴を持つところの人)であって「Aさん」ではない。その意味では、「A x さん」とは実は、「Aさん」本人もその一事例として含むような「Aさんのような人たちの集合」となっている。つまり、「Aさんのような人たちの集合」という「類」が、「Aさん」という「個別」の人物と相互循環的に了解されているのである。こうした「個別事例」と「その個別事例を含む類」との間に発生する提喩的理解によって、実は「個別」対「一般」の二項対立は日常的な認識方法の中ではすでに相互に越境されているのであるが、この点については葛西(2005)に基づいてあらためて検討を進める必要がある。

参考文献

- 1) T.クーン『科学革命の構造』中山茂訳、みすず書房、1971
- 2) 秋山薊二 「社会構成主義とナラティブ・アプローチ ソーシャルワークの視点から」 関東学院大学人文科学研究所報第27号、2004
- 3) 松田真理子『統合失調症者のヌミノース体験—臨床心理学的アプローチ』創元社、2006
- 4) G.A.Kelly "The Psychology of Personal Constructs , Volume 1 Theory and Persoanlity" Norton 1955,

Routledge 1991

- 5) マイケル・マホーニー編『認知行動療法と構成主義心理療法 理論・研究そして実践』根建金男他監訳、金剛出版 2008
- 6) 米盛裕二『パースの記号学』勁草書房、1981年
- 7) 葛西俊治「解釈的心理学研究における理論的基盤とアブダクションに基づくモデル構成法」札幌学院大学人文学会紀要 第78号,pp.1-26, 2005
- 8) 本多勝一『殺される側の論理』朝日新聞社, 1971
- 9) 本多勝一『事実とは何か』未来社 1971
- 10) 葛西俊治「関連性評定質的分析による逐語録研究 — その基本的な考え方と分析の実際 —」札幌学院大学人文学会紀要 第83号,61-100,2008
- 11) 足立麗和「感動労働におけるレジリエンスについて—日常的に業務として葬儀に関わる人達の聞き取りから」札幌学院大学大学院臨床心理学研究科修士論文(未刊),2013

RESEARCH NOTE

The amplification method based on abduction for qualitative approach in clinical psychology

Toshiharu, KASAI

ABSTRACT

A new qualitative approach to summarize a clinical psychological interview was introduced based on the logical inference called abduction given by C.S. Pierce. Any statement in an interview is "amplified" by adding naturally inferred descriptions that should be accepted by the disciplinary matrix of professionals in clinical psychology, with the assessed degree of validity evaluated by the interviewer or researcher, ranging from 1 (highly valid) to 3 (not so much highly valid but very effective in understanding the statement). One of the advantages of this method is that the interviewer or researcher can elicit a tentative theory about the client's inner world even when the number of the similar clients is small or the amount of talks is very limited. Several basic standpoints concerning this method were discussed: 1) each client has his/her own "real world" or "personal construct" proposed by G.A. Kelly, 2) the understanding or interpretation of what the client talked does not belong to him/her but to the interviewer or researcher who has constructed the schema to understand the client, 3) the amplified discourses through abduction inference (with the degree of validity attached to each added statement) works as a reservoir to make a tentative theory about the client's inner world for the disciplinary matrix. Discussion was made about the figurative understanding called synecdoche in the inference of abduction.

Key words: abduction, personal construct, schema, disciplinary matrix, constructivism, multiple reality, synecdoche

(かさい としはる: 本学人文学部教授 臨床心理学科)